

Walter Bagehot

A Study of his Life and Thought together with
a Selection from his Political Writings No. II

by Norman St John Stevas

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

ウォルターは職業として文学を選択することは一度も考えたことはなかったが、銀行家の職を選んだために著作に励む時間ができて、大いに啓発された。1852年の間に彼は『プロスペクティヴ・レビュー』誌に『オックスフォード論』(*Oxford*)と『ハートリー・コールリッジ論』(*Hartley Coleridge*)という評論を発表し、その後、翌年発表された『人間シェイクスピア』(*Shakespeare-The Man*)と『ビショップ・バトラー論』(*Bishop Butler*)という彼の最も卓れた著作のうちの二つが続いた。

『プロスペクティヴ・レビュー』誌はその後廃刊になり、その跡地でバジョットとハットンが『ナショナル・レビュー』誌を創刊し、共同編集者となった。『ナショナル・レビュー』誌にウォルターが最初に執筆したのは『ウィリアム・クーパー論』(*William Cowper*)で続く9年間に宗教や経済に関する論文の他にギボン (*Gibbon*)、ブルーム (*Brougham*)、ピール (*Peel*) やグラッドストーン (*Gladstone*) についての評論と、ミルトン (*Milton*)、スコット (*Scott*)、ディッケンズ (*Dickens*)、サッカレー (*Thackeray*) の評価を執筆した。『ナショナル・レビュー』誌における彼の最後の評論、『ワーズワース・テニソン・ブラウニング：英詩における 純粹・装飾・怪奇の技巧』(*Wordsworth, Tennyson and Browning: Pure, Ornate, and Grotesque Art in English Poetry*) は1864年発表された。この間ずっと『ナショナル・レビュー』誌の采

配と経営は彼の主要な関心事の一つであった。

少年時代からウォルターは激しい身体運動を愛好し、「狩猟、跳躍と殆ど全ての筋肉運動を非常に好んだ」とハットンが記録している。ハーズ・ヒルでは駅まで突進して行って列車に間に合うようにウォルターが特別に切り開いた険しい小道を今でも見ることができる。従兄弟のヴィンセント・ウッド(Vincent Wood)とともに一群のハリヤー犬(うさぎ狩用の小形の獵犬:訳註)を飼っていて、サマセットシャーの荒れ野をその犬たちと疾駆するのが好きだった。この身体を動かすことに対する激しい欲求は、頭脳の回転とともに彼の性格の大きな部分を形成していた。それがために彼は青白いインテリとは正反応の人間となったのである。

1856年12月、一連の出来事がウォルターの生涯における重要な変化を生起すべく定められていた。ジェームス・ウィルソン(James Wilson)の親友で『エコノミスト』誌(*The Economist*)の社主であるW. R. グレグ(W. R. Greg)がリチャード・ハットンに編集者となるよう懇願したのである。ハットンは妻が病に倒れ帰らぬ人となった地である西インド諸島にある墓前への旅をする予定であったので、この申し出に躊躇し、ウォルターに助言を求める手紙を書いた。しかし彼は手きびしい返事を受け取った。「この種の申し出は、毎日街頭で拾えるようなものではありません。休日に関して申し上げれば、それらをあてにしないことを学ぶのは人生の教訓の一つです、休日というものは、大変恵まれた状況にある場合を除いて常雇いの人々にはめったに獲得できないものなのです。私は昨年の秋、ロスコーの家に滞在したときのほかは『何か』仕事をせずに1週間過ごしたことなくだったので、こう申し上げる権利はあると思います¹⁾。にもかかわらず、ハットンは西インド諸島に旅立ち、グレグは彼が帰国するまでその申し出は保留しておくことを約束した。ハットンの手紙はウォルターに自らが『エコノミスト』誌に寄稿することを思いつかせ、グレグ氏とマルティノー博士(Dr. Martineau)を通してバス近郊にあるクラヴァートン・マナーに住むジェームス・ウィルソンを訪ねるよう招かれた。その旅は彼にもう一つの経歴と花嫁の両方を得させることとなった。

ジェームス・ウィルソンは『エコノミスト』誌の所有者であるほかに、ディヴォンポート選出の議員であり、大蔵大臣であった。彼は1目でウォルターが気に入り、両者の交誼の最初の所産は、『銀行家』というペンネームでウォルターが『エコノミスト』誌に寄稿した、銀行業務に関する一連の書簡であった。ウィルソンは非常に活動的な政治家で、ウォルターをロンドンの社交界と政界に紹介した。その間、クラヴァートンの6人の娘たちが相当の関心をもって発音しにくい名前をもった『政治経済学者』の到着を待っていた。「妹二人と私はまだ勉強部屋にいましたので、私たちが初めて彼に会ったのは翌日の朝食のときでした。でもそれから彼はとても目立つことをしたのです。朝食がすんで、私たちのドイツ人の女家庭教師の先生が部屋を出たとき、彼は勉強部屋から私たちにすばやく大きな目を白黒させてこう叫んだのでした。『君たちの先生は卵に似ている。！』私たちはすぐに彼女が卵に似ているのが分かりました。その瞬間から私たちの目には彼は政治経済学者の地位から私たちの仲間の地位に昇進したのでした²⁾とバリントン夫人は回想している。長姉のエリザ (Eliza) は偏頭痛を患っていたので、朝食には出なかったが、前の晩の夕食時にウォルターに会っていた。9ヵ月後に彼女は彼の花嫁になることを同意した。

ラッセル・バリントン夫人はこの時代のウォルターの印象を記したものを残している。「彼は美男子とは言えないにしても、明らかに平凡な人間ではありませんでした。彼は他の誰とも違って、その強い個性は分類のしようがありませんでした。背は高く、やせていましたが、肩はやや怒っていて幅が広く、手は長く繊細で、指の動かし方に特徴がありました。関節のところから指を真直ぐ伸ばして考えごとをしたり話をするときは、よく口をさすったり、額をこすったりしたものでした。とてもきめの細い膚をしていて、生え際近くのところは色が白くて、頬骨のあたりは特にイギリス南西部地方によくみられるように、紅潮したといってもいいほど良い血色をしていました。そのような血色は、穏やかな風、湿気を含んだ空気、りんご園と青々として湿った草原に関係があるのです。まぶたはうすくて驚くほど繊細な膚合いをしていて、白目は少し青味がかっていました。彼は喋りながら部屋をゆっくり歩き、考えがまとまって

言葉になると、ある種の動物が鼻をくくんさせるときのように首をうしろにそらせたものでした³⁾と彼女は記している。

ウォルターは一家全員を好きになったが、エリザが一番美貌で年長であったので、彼が特に彼女に魅かれたのは当然であった。彼はその年ハートフォード街にあるウィルソン家のロンドンの住居を訪れたが、彼が真剣に求婚を始めたのは、8月に一家がクラヴァートンに戻ってからであった。「高原で長い間乗馬をしたり散歩をしました、散歩にはその場のヒロインである姉にろばが与えられねばなりません。姉は体が丈夫ではなかったので、遠くまで散歩をすることができなかつたのです。姉と二人だけになることを望んでいるウォルターは、いたずらしてこのろばを蹴って散歩している二人の向こうに速歩で進ませようとする妹たちの虎視眈眈とした眼に観察されていたのです⁴⁾」。1857年11月5日ウォルターはクラヴァートンでプロポーズしたが、ロンドンでこれが受け入れられたのは2日後であった。エリザは当時かなりの評判をとっていたビバリッジ博士にマッサージを受けに（ウォルターが言い張るには『摩擦してもらいに』）エディンバラへ行く旅を途中のロンドンで中断した。

婚約から10日経って、エリザは『摩擦を受けに』エディンバラに向い、二人の3ヵ月間の別離がラッセル・バリントン夫人によって1933年出版された愛の書簡集を生み出す機会となった。予期しうるように、その手紙はウォルターが未来の妻に烈しい恋心を抱いていることを明らかにしている。「『私はとうとうあの高貴な令嬢と婚約した』とつぶやきながらあちこち歩き回って、嬉しさのあまりソファーを跳び越えたりします」と彼は1857年11月に書いている。彼女は彼の心の奥深い感情をかきたて、彼は婚約者が少し当惑するほどの熱情で意志表示した。「あなたが私の心を奪うまで、私はそれがどのようなものであったか心に描くことができないほどです。以前は何の目的もなく役に立つとは思われなかつた空虚で殺伐とした感情があつたとかすかに思い出せます。昨年1月には人生で何を見出すべきか少しも分かりませんでした。」と12月の手紙に記している。

エリザの気質はかなり冷淡、控え目であつたようで、ヴィクトリア朝時代の

女性の多くがそうであったように、常に自らの健康状態に気を配っていた。さらに、そのような女性によくあるように、意外にも強靱で夫よりも44才長生きをした。「私は苦難を耐え忍ぶ女性の物語など読む気になれませんし、『傷ついた心』をさらけ出す（男性は真実を書いているのか否か分からないし、推測だからと言いつけがたつものです）女流小説家にはいつも怒りを感じてきました。私には彼女たちは女性であることの弱点を表わしているように思われます。でも冗談はさておき、大多数の女流作家は、たしなみのある女性が行使する自制心を女性の登場人物たちに与えていないと思います。勿論、女性の中にはそして『恐らく』女性のかかなり多くの中には感傷的すぎる人々がいますが、愚かな男性ほどではありません。ブロンテ嬢は私を残酷な気分させますし、男性が彼女の作品を読むということが私には理解できません」と1858年1月17日付けのウォルター宛の手紙の中で真情を吐露している。

同じ日付のウォルターの手紙はこれとは対照的である。「日曜日の夕方、私はあなたに手紙を書いているところです。その頃はあなたにお便りするのが最も好きな時間です。何故ならその時分は心が一番落ち着きますし、私の『真の』自己に降りてゆくことができ、そこでは私の『愛』は最も強く深いのです。そのようなとき、あなたも御存知かと思いますが、私たちの愛が何故かこの世に二人だけしかないと感じさせるのです。この世の全ての人々から離れて、私たちは共に深い生命を感じるように思えます。そしてそれを他人に示したり説明したり分け与えることはできないのです。少くとも私の愛情は最も深い瞬間に他の全ての人々から私を孤立させるように思われます。そしてその愛は全身全霊をこめてあなただけに語りかけようとさせるのです。そして恐らくこの孤立感が、深い愛情のゆえに（少くとも瞬間的なものであれ）人が敬虔な気持になる理由の一つなのでしょう……このようなことを書いても気になさらないで下さい、私だけの最愛の人よ。私はあなたへの手紙の中で心にある全てを語るか、さもなくば沈黙しなくてはならないのだからです。いやしくも語るなら、心のうちを『全て』さらさねばなりません。……私がどれほどあなたを愛しているかあなたにお伝えできたらと思います。でもそれは不可能です——それを

あなたにお伝えするには一生かかることでしょう」。このような手紙を浴びせられて、エリザの心は徐々に打ち解けてきた。しかし彼らの結婚生活は幸福そのものだったものの、彼女は自分がウォルターの心にかきたてた情熱の深さを完全に理解していたかどうかは疑問である。夫妻の間に子供はいなかった。

1858年4月21日、二人はクラヴァートンで結婚したが、結婚式の賑やかさが母親の神経にさわるといけないので、ウォルターの両親は共に欠席し、父親はハーズ・ヒルにとどまって妻につき添っていた。新婚旅行は南西部地方で過ごし、ウォルターはコロムで馬車をとめて、母親に次のような短い手紙を書き送っている。「愛する母上、『私たち』は結婚しました。万事順調に進み、妻も愛してくれています。大いなる愛をこめて、ウォルター・バジョット」⁵⁾。帰郷すると、彼らはクリーヴドンの北方の丘にあるアーサー・エルトン卿 (Arthur Elton) の屋敷に居を構えた。その本来の名称は『ベラ・ヴィスタ』であったが、ウォルターは即座に『ディ・アーケーズ』と変更した。「この結婚によってバジョットは19年間の平穏な幸福を享受することができ、また全ての点からみて名著といわれるものではないにしても、明らかに最も評判となり、独創的な作品を産み出すことができた。この結婚は彼を政治の世界に結びつけた。政界との接触なしには、彼はイギリス憲政について研究したり、著作を発表することはありえなかったであろう。彼は職務上商業と財政についてその実際面に精通していたが、『エコノミスト』誌の編集者となったのを機に、その理論的側面の研究に専念することとなった。しかし彼の結婚を生涯における主要な務めを決めた決定的な契機とみなすとしたら、幼時期の教育によって彼はずっと以前から政治と経済の両面に渡る研究への素地ができていたのだという事実も見落とすことができない」とハットンを書いている⁶⁾。

その間、ウォルターの名声は次第に高まっていった。彼の評論集が『イングランド人とスコットランド人の評価』(*Estimates of Some Englishmen and Scotchmen*) という陰険なタイトルのもとに1858年出版されたが、一つにはこの書名のために当時はそれほどの注目を集めなかった。しかし1859年『ナショナル・レビュー』誌に発表された『議会改革論』(*Parliamentary Reform*)

の論文によって名士の仲間入りをした。民主主義の様々な理論に対する彼の批判は、国家の『安定した』部分に対立する『進歩的』部分により多くの比重を与えるために、参政権の穏健な改革を唱道することによって緩和されていた。その論文に非常に多くの称賛が寄せられたので、2月にウォルターはそれを小冊子にして出版したところ、さらにいっそう注目を集めた。3月にジェームス・ウィルソンは著者であるバジヨットとその崇拜者たちのための特別な晩餐会を開き、出席者の中にはグレイ卿 (Grey), グランヴィル卿 (Granville), グラッドストーン氏 (Gladstone), カードウェル氏 (Cardwell), ロバート・ロウ (Robert Lowe), エドワード・ブヴァリー (Edward Bouverie), ジョージ・コーンウォール・ルイス (George Cornwall Lewis), リチャード・ベセル卿 (Richard Bethel) それにサッカレー (Thackeray) らが含まれていた。「それは著名士たちの素晴らしい顔見せであった」と彼は妻に書き送っている⁷⁾。

同年の8月に、ジェームス・ウィルソンはインド駐在財務官に任命され、インドに赴任し、恐慌状態にある財政の改革の義務を負わされた。5年間本国をあとにすると予想して、留守の間ハットン編集者に雇い、ウォルターを経営者に任命した。ウィルソン氏は年末近くにインドに到着し、ただちにその国の財政再建に着手した。それはかなりの成功を修めたが、1860年8月、彼は赤痢に罹って客死した。政府はウォルターが岳父の地位を継承するよう要請したが、彼は『家庭の事情』のためにそれを辞退した。彼は母親の病という重荷を父親の肩だけにしよせたままにしておくことはできないと感じたからである。ジェームス・ウィルソンはインドへ出発する前にウォルターを遺言執行者の1人に指名して、ウィルソン家の者たちにより、今度は『エコノミスト』誌の恒久的な経営者に任命された。ウォルターはスタッキー銀行ブリストル支店の経営者の地位を辞して、ロンドンの銀行監事役となって、アッパー・ベルグレーヴ街にあるウィルソン家のロンドンの住居を共有した。1861年、リチャード・ハットンが『スペクテイター』誌復刊のために、『エコノミスト』誌編集者の地位を辞任して、メレディス・タウンゼント (Meredith Townsend) と共同経営者兼編集者となったために、ウォルターは『エコノミスト』誌の編集者とな

り、死に至るときまでその地位にとどまった。両誌の関係は当然緊密になった。「私は生涯バジヨット氏からは手紙を受け取ったことはない。もし彼に言いたいことがあれば、彼は『スペクティター』誌編集室に駆け込んできたし、私が話したいときには『エコノミスト』の編集室に同じことをしたものだから⁸⁾」とメレディス・タウンゼントは断言している。1週間に1度、ハットンとウォルターはそれぞれの雑誌を印刷に回してから、チェスの試合のために『アシーニウム』（学者、文学者が多く集まるロンドンのクラブ名：訳註）を休会にしたものだった。

こうした間、バジヨット夫妻は政治家たちの『ホーム・パーティ』、昼食会、晩餐会、舞踏会、オペラ、観劇と多忙な社交生活を送った。日曜日にはウォルターは友人のカーナヴォン夫妻と昼食を共にし、午後には伯母のレイノルズ夫妻を訪ねるために、エリザと共にハムステッドまで馬車の旅をしたり、あるいはセント・ジョンの森の『小修道院』で日曜日にオープン・ハウス（私宅を開放して来客を歓迎すること：訳註）を開くジョージ・エリオット（George Eliot）を訪問した。ハーズ・ヒルへの帰郷は定期的になされ、ウォルターは1861年、治安判事に任命されていたので、ウェルズとトントンの4期裁判所（3ヵ月ごとに開かれる下級裁判所：訳註）に出廷するほか、隔週開かれるスタッキー銀行の取締役会にも出席した。

彼は勿論、著作も続けたが、この頃は文芸の問題よりも政治や経済により多くの関心をもっていた。1859年から1877年まで、時事問題についての評論を毎週2つ、『エコノミスト』誌に執筆した。1861年には、アメリカの南北戦争について同誌に31の論説を書き、同年『ナショナル・レビュー』誌にアメリカの憲政についての重要な論文を発表した。バジヨットとハットンの卓抜な共同編集のもとで、同誌はイギリスとアメリカで発行部数が1,500に達したが、当時はずでに勢いを失いつつあった。『ナショナル・レビュー』はユニテリアン派の公的な機関誌ではなかったものの、常にソシヌス教的色彩が色濃くみられ、ハットンは当時すでに神のキリストにおける顕現（Incarnation）の真理を確信しており、1862年、編集から手をひいた。彼の後任としてオリエル・カレッジ

の特別研究員であった、チャールズ・ピアソン (Charles Pearson) が選ばれ、バジヨット夫妻は彼とも親しくつきあったが、編集方針に関して多くの論争がおこるのをくい止めることはできなかった。ピアソンは神学に関する論説はあまりに『重荷』であると考えたが、ウォルターは毎号2つ掲載するべきだと主張した。それゆえにピアソンは辞任し、ウォルターは同誌の廃刊のときまで唯一の編集者の地位にとどまった。

1860年代には、ウォルターは二度の死別を体験した。旧友のクラフが——その『魅力』は幾分、減少していたが、ウォルターは生涯称賛し続けた——1861年、死去したのである。「生き残った幾人かの人々は『それでは君は……だと考えているのだね』というクラフ氏の落ち着いた問いかけに大いに感謝している。その冷静な問いかけの前では、多くのうわべだけの信条やすばらしい論証もかすんでしまったものだ。彼は君の主義主張を目の前で簡潔に述べる癖があり、それで君はどうしてそのような結論に立ち至ったかが理解できてしまいにはそれが嫌になるほどだ。彼が亡くなってしまった現在でも、彼との交際の思い出を非現実的な理論や半可通な思想に対する一種の牽制と感じている人々が少なからずいる」⁹⁾とウォルターは1862年に書いている。2年後に、学者であり政治家であって、ウォルターがその常識に根ざした理性的判断に大いに教えられるところがあった、ジョージ・コーンウォール・ルイス卿が亡くなり、その弔詞が『ナショナル・レビュー』に掲載された。

ウォルターの財政家としての名声は、1865年の2つの出来事によって証明された。銀行券発行法案が議会で提出され、彼は『エコノミスト』誌上でそれを詳細に論じた。1月にはグラッドストーン氏の相談を受け、その法案はバジヨットの提案に従って修正された。1ヵ月後にフランスの大蔵大臣によって、その委員会が通貨の流通と信用を支配している諸原則の研究に着手する前に、彼が諮問に答えるためにパリを来訪するよう招請された。

1865年は何よりも『イギリス憲政論』(*The English Constitution*)の第一部が発表されたために記念すべき年となった。1865年5月5日、ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes) 後にジョン・モーリー (John Morley)

によって編集された『フォートナイトリー・レビュー』誌 (*The Fortnightly Review*) の創刊号に『イギリス憲政論』の1部がその内容のリストを最初に掲載して発表された。その出版は18ヵ月も遅延し、1867年に全体が単行本となって刊行された。この書の目的は、第一次と二次の選挙法改正法案の期間のイギリス憲政の実際の構造を提示することであり、この点においてそれは華々しい成功をおさめた。「現代のいかなる著者も、イギリス政治のこみ入った構造をバジョットほど巧みに解明した者はいなかった。彼の著した『イギリス憲政論』は明晰さと独創性と機知にあふれているので、読者はいかにそれが知識と英知と洞察の賜物であるかに気づかないほどである。例えば、彼が内閣の実態を描くときのさりげない筆致は、非常に痛快であるので、読者はバジョットが内閣の眞の性質と、王室及び議会との内閣の実際の関係を例証した最初の著者であることを忘れてしまうほどである」¹⁰⁾とダイシー (Dicey) は書いている。『イギリス憲政論』は疑いもなくバジョットの最高傑作である。彼は1872年の第二版に序文を書いただけで、一度もその内容に修正を加えなかった。それは新鮮さと妥当性の双方を保持しており、イギリスの古典の一つにあげられているのは、まさしく正当なことである。

『自然科学と政治学』 (*Physics and Politics*) も同様な方法で出版され、第一部が1867年11月1日に『フォートナイトリー』誌に発表された。その中で、バジョットは自然淘汰の法則を政治学と社会の発達に適用し、同胞たるイギリス人に、彼らの実際的なエネルギーがその向けられるべき目標に関して思考を圧倒していたと警鐘を発した。この書を執筆するにあたって、バジョットはヘンリー・メーン ((Henry Maine) の影響を大いに受けたが、メーンの『古代法』 (*Ancient Law*) と同様に時代の検証を受けることがなかった。20世紀になって、それは高い評価を受け、ウッドロー・ウィルソンはバジョットの最も『創造的な』著作と呼んだ。今日では、その書はむしろ陳腐ともいえるほどであり、彼の他の著作の防腐剤の役割を果してきた新鮮さを欠いている。

中年になって、ウォルターは議員になる試みを何度も行った。彼は常に下院を尊重し、その議員が授けられる威信を認めていた。ウォルターは次のように

書いている。「人間は国会議員になることによって、他のいかなる方法によるよりも、はるかに高い社会的地位を得ることができる。古い時代のある政治家がこう言っている。『私はたくさんの書物を書いたが、全く無名であった。演説してみたが同様であった。そこで議員になったら、私はようやくひとかどの人間になれた。』」¹¹⁾ ウォルターは息子の立場が今以上に明らかになることを望んだ母親と同様に、イギリスにおいて『ひとかどの人間』であることの重要性を鋭く認識していた。「有名な政治家達が彼のことを高く評価していたというだけでは充分ではなかったのでした。彼女は息子が自ら有名な政治家になることを願ったのです」と彼の義妹は説明を加えている。1860年、ハットンはロンドン大学選挙区の候補者として立つようにウォルターに提案した。ウォルターは初め辞退したが、その後、立候補することに同意した。しかし、3月31日のロンドン大学の同窓会の席上で、ウォルターはジョン・ロミリー卿(John Romilly)が候補者として選出されるよう提案したが、代わりにウォルター自らが選出された。次の会合でこの決定は覆され、ロミリーが選ばれた。5年後にウォルターはダドリー選挙区より立候補するよう要請されたが、辞退した。1ヵ月後の1865年6月、同様な要請がマンチェスター選挙区から出されたが、今回は出馬することにウォルターは同意した。彼の選挙に関する経歴は短く、妻の日記の中には次のように簡潔に扱われている。「ウォルターはマンチェスターのタウン・ホールズの会合で演説をしたが、聴衆の評判は芳しくなく、立候補を断念した」。ウォルターはある友人宛にこう書いている。「グラッドストーン氏から私を推薦する手紙を受け取りましたが、それは全く無益なことでした。『彼がそれほど高名であるなら、何故フィンズベリー選挙区は彼を選ばないのか』と世間では言っています」。

三度目にウォルターは候補者となり、1866年サマセットシャーのブリッジウォーター選挙区で争った。補欠選挙の公文書が5月31日に発行され、ウォルターはその翌日ブリッジウォーターに到着し、そこで4千人の小旗を振る群衆に迎えられて、彼は四頭立て馬車から彼らに向かって演説を行った。ウォルターは自由党員として立候補し、成功とみえる運動を展開したが、6月6日、多くの

人々は保守党のライバルであるパットン氏 (Mr Patton) に評決を下した。翌日の投票で、パットンは301票を獲得し、ウォルターは294票であった。パットンは数週間後に検事総長に任命されたので、慣例に従って議席を退いた。奇妙なことに、この時バジョットは37票差で新たな対立候補であるヴァンダーベイル氏 (Mr Vanderbeyl) に敗北した。しかし1868年、投票結果の誤算が明らかにされ、ヴァンダーベイル氏は買収の罪で議席を奪われた。トロローブ (Trollope) と同様に、ウォルターは清廉潔白のために選挙で勝利をおさめることができなかつたのであつた。10月に調査委員がブリッジウォーターを訪れ、ウォルターは進んで証言した。彼は委員に、サマセットシャー人特有の卒直さで彼に次のように話しかけた選挙区住民の1人に会つたことを話した。『私はお偉い人達が自分のためになることをしてくれるのでないなら、彼らに投票はしない。お偉い人は来れば必ず何かしてくれるし、もしそうでないなら彼らのためになることはしないつもりだ』。勿論、私はただちにその家を去りました¹²⁾。ブリッジウォーター選挙区はのちに選挙権を剝奪された。

その補欠選挙は奇妙な精神現象を生起し、そのことを1871年にウォルターは『形而上学会』(*The Metaphysical Society*) という書物の中で述べている。その学会はジェームス・ノールズ (James Knowles) が2年前に創立し、ウォルターはその会員であつた。彼の主題は『確信の感情』(*The Emotion of Conviction*) であつた。そして信念の一部は同意という知的要素に、また一部は感情的確信に基づいていることを示した。後者を例証するために、彼は『何年間もの間』自分がブリッジウォーター選挙区の議員になるであろうという『深い確信』を抱いており、どれだけ理性を働かせても、そのことが念頭を去らなかつた、と語っている。「その選挙区は現在は選挙権が剝奪されています。しかしそれでもなお、選挙戦について思いめぐらすと、私が朝はリードしていた時間のことを考えると、そして私が敗北した2時における投票用紙の殺到する様を思うと、さらに候補者指名日に人々が皆手を差し出し、興奮した顔がその姿勢のために別人のようにみえる光景を思い起こすと、懐しい感情が戻つて来て、一瞬、私はブリッジウォーターの議員となるであろうと信じ込んでしま

うほどです』¹³⁾。

1867年、ハットンは再びロンドン大学選挙区の議席をウォルターに獲得させようと試みた。ウォルターは選挙区住民に宛た文書の草稿を準備し、それは著名な支持者たちのリストを載せて回覧された。再び彼は拒否され、その議席はロバート・ロウに渡った。この後、ウォルターは下院議員になるという野心を断念し、続いてヨーヴィル選挙区から、その後リヴァプール選挙区から立候補するよう請願されたが、辞退した。ウォルターが議席を獲得するのに失敗したことは、一見するとやや不可解に思えるが、彼はけっして雄弁家でもなく、彼の声は大衆に向って語りかけるには不適當であった。さらに重要なことには、彼はあまりに厳格であって、有権者に媚びへつらうことはできず、政治家として成功するのに必要な日和見主義という野卑な精神を全くもっていなかった。彼は議員の椅子を他の活動に対する付属物として歓迎したかもしれないが、『議員職』という考えは一度も抱いたことがなかったし、議席の獲得を持続的で真剣な努力の対象としたこともなかった。たとえ彼が当選していたとしても、大臣の地位を得ることは恐らくなかったであろうが、平議員たちが我が世の春を楽しんでいるときに、称賛すべき陣が議員（下院で後方の座席について前方の首領たちを支持する議員：訳註）にはなっていたかもしれない。確かにそのことは彼に歓びを与えていただろう、そして議席を得られなかったことは、ある種の痛恨事であったに違いない。

1866年、オヴェランド、ガーネー、カンパニーの金融取引所の倒産は、重大な金融危機を促進した。その間、ウォルターはグラッドストーン氏との接触を保ち続け、氏はウォルターの全面的賛成を得て、不換紙幣発行数を1,400万ポンドに限定した1844年のピールによる銀行設立許可法案を保留した。しかし、グラッドストーン氏に宛た5月21日の手紙の中で、その危機は銀行紙幣というよりむしろ銀行預金の枯渇によって引き起こされたものであると主張した。4年後に、彼の3番目の主要な著作であり、3年経って単行本として出版された『ロンバード街』(*Lombard Street*)にとりかかり始めたとき、このテーマを再びとり上げている。その書名が暗示するように、その書は金融市場の『具体

的な現実』を描写するよう意図されており、中核的な金準備の管理人としてのイングランド銀行の立場は、金融市場がイギリスの信用を維持する際にその政策が通常の民間銀行に特有の種々の理由によって決定されることのないように、独自の役割を演ずることであるという事実を常に認識させようとした。それが書かれてからの金融市場における様々な変化にもかかわらず、『ロンバード街』はハートリー・ウィザース (Hartley Withers) の言葉によれば、「その問題を理解したいと願う人々が誰も無視することができない古典」の地位を保ち続けている。

1867年41才のときに、ウォルターは最初の重い病を経験し、それが完全に回復することはなかった。ホルボーンにあるセント・アルバン教会の深夜ミサからの帰宅途中で、彼は風邪をひき、それがもとでひどい肺炎に罹った。1869年7月に再発し、翌70年の母親の死によってさらに悪化した。このような妨げにもかかわらず、彼は著作活動を続け、『自然科学と政治学』、『ロンバード街』という著作の他に、定期的に時事問題について健筆をふるい、アイルランド教会の制度廃止、選挙法改正法案、通貨問題などを論じた。

彼はウィリアム・モリス (William Morris) の作品に大変興味を感じずるようになり、ハーズ・ヒルの書斎や他の部屋はモリスの壁紙や皮張りて装飾し直された。家庭内におけるもう一つの変化が1870年に起った。つまりアッパー・ベルグレイヴ街にあったロンドンの住居を立ち退いて、ウィンブルドンにある『ポプラ館』に移転したからである。そしてバジョット夫妻は続く3年間、そこで生活した。ロンドンとサマセットシャーにおける生活は、ヨーロッパ大陸、特にスイスとスペインへの旅によって分散されることとなった。1873年、夫妻はフランスを訪問した。その国はウォルターが若い頃から関心を持ち続け、『エコノミスト』誌上でしばしば、その統治者であるナポレオン三世について言及したものだ。1874年秋、フランスを三たび訪問したあとで、新しいロンドンの住居が今度はラトランド・ゲイトに定められた。しかしここも転居し、腰の落ち着く間もない夫妻は、最終的にクィーンズ・ゲイト・プレース 8 番地に住居を構え、そこをウィリアム・モリスの壁紙とド・モルガン (De Morgan)

のタイルで装飾した。「ウィリアム・モリスはまるで叙情詩を創作するように、客間を創造する」とウォルターは語っている。モリスは客間のカーテンとソファの布張り地として青のダマスク織りを選んでいた。「2, 3ヵ月ごとに、より糸の見本を私のところに持ってきてくれるが、カーテンはまだ届かない」ともウォルターは語っている。1875年4月、ウォルターは規約2条にもとづき、アシーニウムメンバーに選ばれた。「委員会は昨日、アシーニウムにおいて快よく私を選んでくれた。規約によって委員たちは毎年9名の『科学、文学、美術、または公務において卓越した才能を発揮した者』だけを選ぶことができるのだ。一体『私の』卓越した才能はどこに属しているのだろうか」と彼は妻に宛て書いている。

1875年から76年の間、ウォルターは多忙をきわめ、経済と財政の問題に没頭した。1875年7月、イングランド銀行委員会の諮問に答えるよう招請され、これが縁でスタッフォード・ノースコート卿 (Stafford Northcote) と親交を結んだ。同年、彼は旧友で気持の良い交際をしたカーナヴォン夫人 (Lady Carnavon) を失った。彼はイギリス経済についての体系的研究にとり組み、それは3巻もの書物にまとまるはずであったが、未完に終わった。第1回分は『イギリス政治経済の根本原理』(*The Postulates of English Political Economy*) という書名で、1876年の1月と2月の『フォートナイトリー』に発表され、ウォルターは再版の権利を条件として明記した。第二巻は著名な経済学者の伝記から成る予定であったが、実際はアダム・スミス (Adam Smith)、マルサス (Malthus)、リカードゥ (Ricardo) を含めたほんの数名についてだけ書かれた。彼の死後、これらや他の評論は覚え書きの形で書かれたいくつかの論説文とともに、リチャード・ハットンおよび『エコノミスト』誌でウォルターの助手をつとめていたロバート・ジフェン卿 (Robert Giffen) によって編集され、『経済に関する体系』(*Economic Studies*) として出版された。1876年の間に、彼は銀の価値低落に関する一連の17に及ぶ論文をも書いた。そしてそれらは『エコノミスト』誌により、小冊子の形で2,000部再版され、ただちに売り切れた。『フォートナイトリー』における彼の絶筆となった論文、『オルソップ卿と1832

年の選挙法改正』(*Lord Althop and the Reform Act of 1832*)は、1876年11月に上梓された。1877年の初頭に彼は経済学への最後の貢献をした。つまり、多額の経費を要する教育と衛生の改革計画のために政府が予算を必要としていた時に、大蔵省証券 (Exchequer Bills) に対する大衆の支持の低下に困惑したスタッフォード・ノースコート卿の相談を受けたのである。ウォルターは即座に国庫証券法案 (Treasury Bills) を起草し、それは以後ずっと効力を発揮している。

1876年から77年にかけての冬を彼は キーンズ・ゲイトの新しい住居で過ごし、『経済学の研究』に従事した。彼が『新しい道楽』と呼んだカーテンはまだ『創作』されておらず、3月の冷たい風にあたって風邪をひいた。彼は自らの死期の近いことを悟ったようで、ロンドンでの最後の週のある晩、二階に上り、遺言をしたためた。そして1877年3月20日、病身をおしてハーズ・ヒルまで旅をし、父親と最後の対面をした。長旅と冷たい晩の空気の中をヨーヴィル駅で長く待たされたために、病状はさらに悪化し、23日には重態に陥った。その日、医者は肺充血という診断を下したが、翌日には少し持ち直し、エリザの看護のおかげで『ロブ・ロイ』(*Rob Roy*) を読んで楽しむほどに回復した。翌日、容態が急変し、衰弱したが、妻のエリザが枕を直そうとしたとき、彼はからかうようにいかにも彼らしくこう述べた——「勝手にさせておくれ」¹⁴⁾。そのすぐあとで彼は妻を引き寄せて眠りに落ち、陽が沈むときのように安らかに息を引きとった。遺体は彼の愛したパレット河とサマセットシャーの田舎の溪谷を見はるかすラングポートの墓地に埋葬された。彼の死去の知らせが伝えられると、友人や要人からの弔詞がハーズ・ヒルに殺到した。

「もし私がウォルターよりも長生きしなかったなら、息子がいかに偉大な人間であるかを知らなかったであろう」¹⁵⁾ と父親は語った。

〔原文註〕

- 1) *The Life*, p. 225.
- 2) *Ibid.*, pp. 229-30.
- 3) *Ibid.*, pp. 230-1.
- 4) Mrs Russell Barrington, *The Love Letters of Walter Bagehot and Eliza*

Wilson 1857-58 (London, 1933)

ラブ・レターからの抜萃は全てこの書から採られている。

- 5) *The Life*, p. 257.
- 6) R. H. Hutton, *Memoir: The Works*, I, p. 33.
- 7) *The Life*, p. 271.
- 8) *Ibid.*, pp. 358-9.
- 9) *Mr Clough's Poems* (1862): *The Works*, IV. p. 133.
- 10) A. V. Dicey, *The Law of the Constitution*, Intr., (9th ed., London, 1939), p. 19.
- 11) *The Advantage and Disadvantage of Becoming a member of Parliament* (1874): *The Works*, IX. p. 132.
- 12) *The Life*, pp. 391-2.
- 13) *The Works*, V, p. 100.
- 14) *Ibid.*, pp. 434-4.
- 15) *Ibid.*, p. 457.